



鳥瞰。京都御苑を背に鴨川を臨むホテル（撮影：プライズ 山崎浩治）

たせてホテルの奥へ奥へと引き込むが、そこにも掘り込んだ中庭や東側の滝を通じて、外光を導いている。また、景観規制を受けて傾斜屋根を持つが、そこには設備機器を置きづらいことから、石積み風の滝の背後に冷却塔などの設備を巧みに隠して配置している。

なお、このホテルは、大阪万博にあわせて建設された吉村順三設計のホテルフジタ京都（一九七〇年竣工）を解体した跡地に建設された。したがって、以前の建物のボリュームとあまり変わらないだけでなく、滝の継承や石の再利用のほか、別邸を解体して内部で再構成したことにより、新築ながら昔から存在していたかのような過去との連続性を感じさせる。また建築主は、設計者が現代における日本建築として高く評価されている京都迎賓館を手がけたという高い実績をよく知った上でこの仕事を依頼しているが、このホテルは木さえ使えば和風という単純なデザインではなく、むしろアルミニウムやステンレスなど、現代の素材を用いた精密な細部と、全体

京都の鴨川に面する恵まれたロケーションに建つ一方、地下水の対策が求められたり、近年さらに厳しくなった高さ制限など難しい条件のプロジェクトだが、設計者は建物の低さや敷地の細長さという悪条件を逆手にとって、高級ホテルにふさわしい品格のあるデザインを実現した。現地訪問の際、川向かいから見ると背後のマンションの方がはるかに高く目立ち、ホテルはその手前にそっと置かれている。近付くと、地域に貢献すべく、みそそぎ川を修景したり、西側は二階後退して堀のような外壁の脇を遊歩道として市民に提供するなど、周辺への気遣いもなされていた。正面の道路からは、水のせせらぎに誘われて、少しずつ降りながら、奥に入ること、ラウンジにたどりつき、さらにここから階段で下に向かうと、レストラン、ボールルーム、プールなどにアクセスできる。落ち着いた雰囲気の中、来訪者に期待感を持



BCS賞

2016年 第57回
BCS賞受賞作品紹介



暁に映える二条通側の外観
（撮影：プライズ 山崎浩治）



鴨川を臨む大きなガラス窓の客室
（撮影：プライズ 山崎浩治）



コーナー客室よりアプローチを臨む
（撮影：ナカサアンドパートナーズ）

選評



BCS賞は、建築の事業企画・計画・設計、施工、環境とともに、供用開始後1年以上にわたる建築物の運用・維持管理等を含めた総合評価に基づいて選考し、建築主・設計者・施工者の三者を表彰する建築賞です。
この賞は、1960年にはじまり2016年で57回を数えます。

< 2016年 第57回 BCS賞受賞作品 > 飯野ビルディング 大手町タワー／大手町の森 京都国立博物館 平成知新館 グランフロント大阪 高志の国文学館 ザ・リッツ・カールトン京都 住田町役場 東京スクエアガーデン 流山市立おおたかの森小・中学校、おおたかの森センター、こども図書館 日清食品グループ the WAVE 穂の国とよはし芸術劇場 プラット 八幡厚生病院本館 山梨学院大学国際リベラルアーツ学部棟 Ribbon Chapel 龍谷大学 和顔館 [特別賞] 札幌市北3条広場・札幌三井JPビルディング
日本橋室町東地区開発：室町東三井ビルディング、室町古河三井ビルディング、室町ちばぎん三井ビルディング、福徳神社

建築主 より ‘民間の迎賓館’と呼ぶに相応しい ホテルを目指して

初めに考えたのは、この地に相応しいホテルとはどういうホテルかということでした。

ここにはその昔、公家が居を構えて以後、角倉了以の屋敷、藤田伝三郎の屋敷、ホテルフジタ京都が建っていました。その培われてきた伝統を引き継ぎ、この地に相応しい外観と環境に配慮したホテル、「民間の迎賓館」と呼べるホテルをつくりたいと考えました。

そして、厳しい高さ規制や難しい地下工事と

いった多くの課題を、設計者・施工者・ホテルオペレーター・インテリアデザイナーをはじめ多くの関係者と協議を重ねていき、皆様の協力を得て無事に竣工、オープンすることができました。

このザ・リッツ・カールトン京都が、ますます多くの世界の皆様に愛されるよう、今後もホテルオペレーターと協力して発展させていきたいと思っています。



積水ハウス株式会社
開発事業部
西日本設計統括
部長
岡本勝政
Katsumasa Okamoto

設計者 より

京都の地にふさわしいホテルを 光と影とプロポーションでつくる

新ホテル建設にあたっては、この敷地に建っていた吉村順三氏設計のホテルフジタを惜しみつつ取り壊さなければなりません。このことについては、建て替わる建築を素晴らしいものにするによって償うしかないと考えました。

計画当初より五つ星ホテルを誘致できる設計を行いました。ホテルブランドがザ・リッツ・カールトンに決定したのは着工前であり、

急遽さまざまな設計変更が必要になりました。そこでこれを好機ととらえ、最下階に新たに設けたプールへも滝を通じて自然光を落とすことができ、ホテルフジタの滝再現の意味をさらに深くすることができました。

外装については、ホテル用途であるかないかは考慮せず、徹頭徹尾研ぎ澄まされたプロポーションを追求し、さまざまな光と影を創り出しています。



株式会社日建設計
執行役員
設計部門副統括兼代表
大谷弘明
Hiroaki Otani

施工者 より

世界の観光宿泊客に愛される ホテルのために厳しい施工条件を克服

本工事は工期が短く、鴨川のすぐ横で大深度の掘削を行うなど難易度の高い工事でした。粘土層がない地層での大深度掘削には、近隣井戸の漏水対策や大量の地下水処理など事前に多くの技術検討が必要で、現地試験と解析を何度も繰り返して最適な施工計画を実現しました。また、建物は間口が狭く奥行きの長い形状のうえ、敷地のほぼ全域を躯体として使用します。そのため材料置き場や工事車両の動線をいかに確保

するかが課題でしたが、資材物流の効率化により、搬出入に必要な時間やスペースを大幅に削減することで解決しました。

工期内に無事に建物を引き渡すことができたのは、職員と職人たちが一致団結してこれら様々な課題を解決したからです。世界の観光客から高い評価を得ているザ・リッツ・カールトン京都の施工に携わったことを大変光栄に思っています。



株式会社大林組
執行役員京都支店長
東谷昌次
Masatsugu Higashitani



光庭と対峙する夷川邸「御殿の間」(撮影：スタジオムライ (鈴木正見))



光庭につづく細長く奥深い吹抜け(撮影：ナカサアンドパートナーズ)

的に抑制されたデザインによって、二十一世紀における和の解釈に挑戦したことにも好感が持てる。
客室はすべて地上階に配置されていて、それぞれに豊かな空間で眺望などを楽しむことができる。特に最上部の四階は高さ制限によってセットバックが求められたことから、川側に屋上庭園を設けている。客室数は決して多くないが、高単価の宿泊費でも満足できる空間のデザインによって、事業計画が成立し、リッツカールトン

ホテルの本社からも高い評価を得ている。また館内にサインがほとんど見当たらず、「客が迷うことはないのか」という質問に対し、ホテルスタッフが常に客の動きに配慮しており、もしそのようなことがあれば、すぐに案内できるといふ。事業主であるホテルがデザインの価値をよく理解し、スタッフによる運用も行き届いた建築と言える。

【選考委員】
五十嵐太郎・宮崎浩・河野晴彦

計画概要

建築主：積水ハウス(株)

設計者：(株)日建設計

施工者：(株)大林組

所在地：京都府京都市中京区鴨川二条大橋畔
竣工日：平成25年10月31日

敷地面積：5,937㎡
建築面積：4,598㎡
延床面積：24,682㎡

階数：地上4階、地下3階
構造：鉄筋コンクリート造
(一部鉄骨鉄筋コンクリート造)